

Dick King-Smith 著 *The Fox Busters, Magnus Powermouse,*

Harry's Mad に於ける逆転の示唆するもの

稲 田 依 久

Meaning of Inversion in *The Fox Busters, Magnus Powermouse,*
Harry's Mad by Dick King-Smith

Iku Inada

抄 録

The Fox Busters, Magnus Powermouse, Harry's Mad は自然界の鉄則である生存競争に於ける弱肉強食、適者生存のみならず進化論的種の特徴に反する状況を設定して自然科学的常識では存在しえない逆転した世界を呈している。これに人間中心の世界が作り出している常識としての人間の優位性を否定するという逆転を更に加えることによって人間の実体、実質を再確認させ、人間と自然との共存の可能性を訴える物語りである。*The Fox Busters, Magnus Powermouse, Harry's Mad* の呈する逆転とその意味するところを物語りにそって探る。

キーワード：逆転、価値観、自然との共存

(1997年9月6日 受理)

Abstract

This book review discusses Dick King-Smith's intention found in the inversion he uses as the means to make the readers aware of their being detached from nature, which may suggest them a way to live in harmony with nature.

Key Words : Inversion, Sense of Value, Nature, Children's Literature

(Received September 6, 1997)

I

Dick King-Smith の作品、*Daggie Dogfoot*, *The Sheep Pig* が自己の可能性追及の物語²¹であり、*Saddlebottom* が生への希望の物語²²であると論じたのに次いで、同じく Dick King-Smith の動物物語 *The Fox Busters*²³, *Magnus Powermouse*²⁴, *Harry's Mad*²⁵ に共通する主題である逆転の示唆するところを以下に論じる。

II

仔豚が主人公の *Daggie Dogfoot*, *The Sheep Pig*, *Saddlebottom* と相前後して出版された三作品、*The Fox Busters*, *Magnus Powermouse*, *Harry's Mad* の主人公はそれぞれ雌鶏、家ネズミ、オウムである。仔豚が主人公の三作に於ても主人公は純血種には許されない欠陥²⁶をもって生まれたが故に存在価値がないと断定され、食用に供される他には用のない豚であると思われていた²⁷ところ、それぞれに特殊な才能を発揮して活躍することで存在価値が認められる²⁸という一種の価値の逆転が認められる。が、これらの作品に於ける逆転は、主人公がそれぞれの存在の意味を自ら築きあげたり、自覚するに至る過程の努力、決断の結果としての付随的所産として描かれているにすぎない。一方、ここで論じる三作品は物語の構成そのものの基盤を支える大前提として反-常識としての逆転が用いられている。例えば *The Fox Busters* では「飛べない筈」の鶏が飛び、勇気があって強いが故に「評価される筈の雄鶏」よりも雌鶏のほうが思慮深いが故により高く評価され、「鶏を食べる筈の狐」が鶏に殺される。*Magnus Powermouse* では「小さい筈」の家ネズミがドブネズミよりも大きく、「猫に食べられる筈」の家ネズミが猫を襲う。*Harry's Mad* では「言葉を教わる筈」のオウムがクロスワードの答や品詞を、また料理法も人間に教える。三作に共通する主題としての逆転であるが、逆転している価値観は二種類に分類できる。*The Fox Busters* と *Magnus Powermouse* では自然界の鉄則である生存競争に於ける弱肉強食、適者生存のみならず進化論的種の特色に反する状況を設定することで、自然科学的常識では存在しえない世界を呈して、その荒唐無稽さや痛快さをかもしだしている。また *Harry's Mad* では人間中心の世界が作り出している常識としての人間の優位性を否定することで、人間の実体、実質を再確認させる。この二種類の逆転が呈している意図を作品ごとに探る。

III

逆転を主題にした三作品のうち *The Fox Busters* と *Magnus Powermouse* に於ての逆転は「三びきのこぶた」²⁹、「狼と七匹の子やぎ」³⁰ に見られる強者と弱者の逆転に通じる主題であり、いずれもが自然界の鉄則やそれを体験上知る人間の常識が覆る意外性、痛快さを効果としてもたらし、知恵と勇気の重要性を教えるものである。この点では Dick King-Smith の *The Fox Busters* と *Magnus Powermouse* も従来の昔ばなしと同じ物語りとしての特性を有しているといえる。³¹

しかしながら *The Fox Busters* での逆転は従来の昔ばなしの設定、即ち弱者が窮状に

あって持てる力と知恵を生かす、だけではない。狐に立ち向かう鶏という弱者の側の努力、工夫が結実して新しい技術を身に付けるという物語における継続的時間の経過と、若い雌鶏三羽が自ら選択した目的に向かう生き方が逆転を生ぜしめるのである。主人公のこの生き方は Dick King-Smith の後の作品 *Daggie Dogfoot*, *The Sheep Pig* の主題と相通じるものであるが、主人公の鶏の努力、工夫の目的は *Daggie Dogfoot*, *The Sheep Pig* におけるような自己確立と自己の存在意義を求めてではなく、物語の表題に明らかなように仲間の鶏を殺した狐への復讐と懲らしめである。また *The Fox Busters* では物語展開上重要な役割を果たす恩恵者となる登場人物が、*Daggie Dogfoot*, *The Sheep Pig* のように第三者の動物や人間ではなく、同じ鶏の一家の両親である。*The Fox Busters* では人間はむしろ「行きあたりばったりで、楽天的で、怠け者」(p. 10) 故に頼りにならない思慮浅い者として描かれている。

従来の昔ばなしとの共通点という見地からいえば、結末も常套的な「めでたし、めでたし」、即ち狐と鶏という強弱の逆転が成立したことで鶏にとって「外敵の侵入の心配のない」(p. 111)、平和な生活と「繁栄が続いた」(p. 111)、というものである。物語が狐への復讐という目的を達成するために展開していくという、「話のすじが一本である」²¹²、即ち「エピソードが縦につながって一本の線で進んでいく」²¹³ という特徴は物語理解を容易にするが故に、年少者にも理解しやすく、エピソードの持つ意味、物語の呈する主題を読者が自分なりに解釈、意味付与し易くなるという利点がある。が、同時に物語の構成を平板にするという欠点ももつことになる。

以上の三点を考慮すると *The Fox Busters* での主人公の立場の逆転、努力の結実という要素が後の *Daggie Dogfoot*, *The Sheep Pig* に於て更に洗練され、深化して Daggie と Babe という実存的登場人物を生み出したと考えられる。それでは *The Fox Busters* は単なる移行的存在としての位置しか占めない作品であるかといえばそうではない。Dick King-Smith の既版の物語のなかで逆転という主題を初めて扱った作品であるという点で *The Fox Busters* 独自の存在意義を有している。

The Fox Busters における逆転の意義は本章の冒頭にも述べたように、目的をもつこと、生き方を選択する自発的行為と努力、工夫の継続の結果が、本来ならば実現不可能な強弱の立場をも転倒させようという可能性への希望の示唆であると言える。冒頭部から鶏が狐から身を守るために、空を飛ぶ能力を身に付けており (p. 12)、加えて自然淘汰的に狐に狙われにくい暗い色 (p. 11) をしており、早く走れるように足が長く (p. 11)、頭がよく (p. 11)、人間の文字も読める (p. 13) という既に尋常でない世界を設定して、登場する鶏の特殊性が強調され、逆転—可能性という全体的枠組の中核が呈されている。その中でも特に優秀で狐を凌駕する知恵の持主である雄鶏と雌鶏 (p. 14) の間に生まれた12羽のひなのうち、9羽の雄鶏ではなく、Ransome, Sims, Jefferies という三羽の雌にわとりが主人公である。ここに逆転—可能性の示唆を支える細部が二点あげられている。

まず第一に両親のうち雌鶏のほうが雄鶏よりもその内性の質が高く評価されている点である。共に群のなかで優秀であり、雌鶏は夫である雄鶏のよさを認めて愛している (p. 16)

が、性格的に雄鶏は衝動的で思ったことをすぐ口にし、社交的 (p. 15) であり予想能力はあったがその観察力は表面的 (p. 16) で、尊大で自己評価が高く、上首尾はすべて自分のおかげである (p. 17) と公言してはばからない。一方雌鶏は思慮深く、用心深く (p. 15) 考えを内に秘めて物静かであり (p. 15)、その意見は的を射ており、仲間の信頼を集めている (p. 16)。それゆえ娘達の命名に際しても、父親がたまたま付けた名前が娘のそれぞれの特徴によくみあっていることを見抜いている (pp. 27-28)²¹⁴ この父、母の両者への評価は三羽の雌鶏の訓練中の両者の言行描写において何度も繰り返されるのであるが、狐攻略の策略の重要部分はすべて母親である雌鶏の考案であり (pp. 47-48, pp. 50-51, pp. 69-70, p. 75, pp. 83-86)、物語の大団円である四頭の狐との戦いの場面で決定的な意味をもつことになる。それは血気にはやって無謀にも狐の頭に飛びかかるという雄鶏の衝動的な行為が、狐を撃とうとした農場主の弾にあたって結局は自らの死を招いてしまう (p. 107) 点である。

第二には同じひとかえりの12羽のひなのうち、弱者であるべき雌の3羽が9羽の雄に勝っている点である。卵からかえったその日のうちに空を飛び始めた (p. 18) 一羽の雌に加えて、あとの二羽も通常よりもよく発達した風切り羽をもっており (p. 19)、日を追って三羽の飛行力の優秀さが明かになっていった (p. 19)。加えて知力における優秀さも明かになる。いちご畑の囲いの中にとじこめられた鶏が狐に食べられてしまうという事件がおき (pp. 37-44)、鶏にとって飛べることが狐の襲撃に抗する唯一の手段ではないことが判明する。母鶏が狐を攻撃する方法として空中を飛びながら狐にむかって卵を産み落とすことを考えついた (pp. 47-48) 後、その練習をしながら卵の硬度を増して攻撃力を強めるために固ゆで状態で産むための方法を考えついて、試行錯誤を重ねるのも三羽の雌鶏であった (pp. 57-60)。工夫をかさね、努力を続け、忍耐力を養って狐攻撃の練習を続け、母鶏の考案で更に卵の殻の硬度を増すために石灰とカキ殻の粉を多く食べて万全の準備が整った時に、娘鶏のリーダー格の Ransome は、母親の賢さと父親の勇気を兼ね備えて (p. 88) はいたが鶏として拭い去ることのできない狐への恐怖心を克服するために単独で狐と対峙することを決心し (p. 89)、実行し、試みは成功する (pp. 90-94)。しかして狐との戦いの日が来て三羽の雌鶏はそれぞれ固い卵を空中高くから狐めがけて産み落とし、三頭の狐を直撃して殺してしまう (pp. 103-109)。

弱い筈の鶏が、しかも雄鶏よりは体力的に劣る筈の雌鶏が、雌ゆえに可能な産卵という能力と、知力、勇気、努力、工夫をもって雄鶏にはできない活躍をすることで、強い筈の狐を殺してしまうという逆転が描かれている。これは「弱者」とみなされている雌に集約される女性にとっての啓発と激励、弱いうえに飛べない筈の鶏に代表される既成概念、固定観念的弱者への希望の示唆といえよう。

IV

続いて Dick King-Smith の *Magnus Powermouse* に於ける逆転が意味しているところを考える。ここでの逆転の起因は従来のお話のように「窮鼠、猫を噛む」式の危機的状況

に於ける機転としての知恵や勇氣ある行動ではなく、主人公の存在そのものが逆転—反自然の故に成立するという前提を有しているのである。前提の第一は主人公の出生である。*Magnus Powermouse* に於ては Oxford 大学の古典文学専攻の教授宅にかつて住みついていた教養ある父ネズミ (p. 8, p. 18, p. 37, p. 56)、無学ではあるが洞察力と勇氣ある厳しくも愛情深い母ネズミ (p. 3, p. 7, p. 33, p. 38, p. 47, p. 50, pp. 58-59, p. 69) との間に息子が生まれる。その子は生まれながらにして「ドブネズミの子と同じくらいの大きさ」(p. 7) であり、短期間に急成長して生後四週間ほどで母ネズミの「二倍の大きさ」(p. 20)、生後二ヶ月では「ドブネズミと同じくらいの大きさ」(p. 33) になり、ラテン語の素養のある父親によって「巨大な」の意味の Magnus と名付けられる。この主人公の大きさは自然現象の突然変異の結果ではなく、母ネズミが妊娠中に毎日食べた豚の肥育剤の錠剤の効果 (pp. 12-13) という人為的な出来事である。人間が飼育している豚の体重を増やしたいという身勝手な欲望から開発した科学的所産が、人間の当初の目論みとはかけはなれた意外な効果を、人間にとっては無用であり、さらには害を及ぼす動物として除去する対象であるネズミを肥らせ、そのネズミが巨大さと旺盛な食欲ゆえに農場の人間に多大な被害を及ぼす^{註15}。農場の人間が飼っているペットである猫が巨大なネズミ Magnus に尾を噛まれ (pp. 21-22)、二度目には尾を喰いちぎられる (pp. 51-55) という被害も被る。ここには Dick King-Smith の人間、科学への批判がみてとれる。自然の法則にのっとらない非自然的人為的手段が、人間に恩恵と共に思いがけない影響、しかも当の人間にとって好ましくない悪影響を及ぼし得ることを警告している。

第二は、主人公の存在そのものである。人間の身勝手な意図が巨大なネズミを生ぜしめたことが自然の本来性を崩したことで、ネズミに代表される自然界にも好ましくない影響を与えてもいる。小さい筈の家ネズミの母親が巨大な一匹の仔を持つことで、同じ時に生まれたほかの 5 匹の正常な大きさの仔ネズミに十分乳を与えられずに生後二日で死なせてしまい (p. 10)、親ネズミ達は巨大な一匹の子供の食欲を満たすために絶えず餌を探し求めねばならず、その間に猫に襲われそうになったり (p. 21)、手狭になったゆえに棲み家をかえるために納屋に入り、父ネズミはネズミ捕りの罠にはさまれて片足の指を失う (pp. 63-66)。しかし皮肉にも、また同時にある種の希望、救いへの伏線でもあるのだが、巨大な息子ネズミの怪力のおかげで父親は罠から逃れることができる (pp. 64-66)。更には同じ農場の動物仲間であるウサギのローランドがこのネズミの一家を物心両面から援助する。^{註16} ここでは人間及び人間の科学文明に関わるものは動物である猫ですらすべて否定的な存在であり、一方動物が代表する自然はよいものなのである。このように *Magnus Powermouse* における逆転は人間の自然への背信、自然からの乖離、身勝手さへの警告が基調にあるといえる。

しかしながら人間が再び自然との共存関係を回復しえない絶望的な利己主義者として描かれているわけではない。Dick King-Smith は再度逆転の手法を用いて自然と人間の和解の可能性を呈するのである。ここでの逆転は人間と動物の両者に生じる。まず第一はネズミ捕りを生業とするを老人ジムが、その職業とは裏腹に、あちこちで不用とされるよう

になった動物や鳥を引きとって飼っているという愛情深い人物 (p. 85) であるという伏線が敷かれている上に生じる。そのうえでジムはネズミに関する古今の書物を多く読んでおり、伝説的ドブネズミの王の存在についても知っており、その存在を信じている。(pp. 75) Magnus 一家の捕獲を依頼され、巨大な Magnus を捕らえた時には物語にでてくるドブネズミの王と同様の家ネズミの王に出会えたと思って、Magnus を丁重に扱う。(p. 86-90) Magnus も彼の好意を感じとって仲よくなる。(pp. 88-90) 互いの言葉は理解できないながら (p. 88)、ジムが Magnus に示した好意と敬意、十分な世話は単に Magnus に受け入れられただけではなく、Magnus に変化、しかも成長をもたらす。親ネズミと暮らしている時には食欲が満たされる事だけを望んで苛立ち、感情と欲求とを表現する一語もしくは二語しか話せなかった Magnus がジムと暮らし始めて我慢と思いやり (pp. 87-88) を身に付け、ジムの肩の上の何処にでも一緒に行くようになり (p. 91)、脈絡のある文で考えるようになる (p. 92)。さらには両親と恩人のウサギとの再会のきっかけとなった交通事故で、気絶した後にジムの家で正気に戻った Magnus は父親譲りの能弁家となる (pp. 108-118)。このように人間に愛情があり、相手が誰であれその存在に敬意をはらって接するかぎりにおいて両者の間に理解が生じ、関係が築かれ、更には成長ももたらされるというのである。

第二には農場で「飼われている」筈の動物が、実は人間を自分達の用に供する存在であると考えている点である。交通事故がきっかけとなってジムの家で暮らし始めた Magnus 一家とウサギのローランドは、ローランドがペットとして飼われていた故に人間の言葉を理解できるため、通訳としてジムの言葉をネズミ達に伝え (p. 119)、また Magnus も体験からジムの人柄、動物への愛情、好意を両親に伝えてジムを信頼にたす人間であることを説明して、ジムとのよい関係の持ち方を助言する (p. 122)。ここでは動物が主体であり、人間は動物に従い、仕えるものとして描かれている。例えばウサギのローランドが Magnus にジムを「よく飼い慣らした」(p. 120) と言い、Magnus は両親に向かって「人間は動物にかまってもらいたがっている。行って撫でさせてやるといい」(p. 122) と言うのである。ローランドも「ジムに親切にすれば喜ぶから、ジムの手から食物をもらおうといい」(p. 123) と Magnus の両親に助言する。動物と人間との関係において関係を結ぶ主導権は人間にのみあるのではなく、動物にも同じ権利があることを示唆するものである。

これらの逆転による関係修復もしくは新たな関係の成立が人間と動物との和解、即ち人間をよい仲間と認めて受け入れ、共に「いつまでも幸せに暮らしましたとき」(p. 123) という結末に至らせるのである。この昔話の常套的結末はマックス・リュートイの言う「人間を非本来的な在り方から本来的な在り方へ救い出すことを象徴している」^{註17}に通じる展開であるといえよう。このような物語である *MagunusPowermouse* では、*The Fox Busters* の自然界に於ての動物同士の強弱、又は従来の雌雄に対する価値観の逆転という一元的結末から一步踏み出して、人間と動物、自然界との共存の可能性を探るという未来志向的試みがなされている。ここに同じ逆転を主題にしている物語ではあるものの、*Magunus Powermouse* には作者の意図、視野の広がり、深まりを見ることができる。

V

逆転を主題とする Dick King-Smith の第三作 *Harry's Mad* は、アメリカのある大学の応用言語学の名誉教授に40年飼われたことで人間の言葉を自在に話すことができるようになった灰色アフリカオウムの Mad と、初代の飼い主である教授を大伯父にもつロンドン在住の Harry が大伯父の遺言で Mad を相続し、その両親と共に Mad と生活することでひきおこされる数々の出来事の物語りである。動物が人間の意図を言葉を介してある程度理解することができるという事実は、体験的には周知のことであり、最近の介助動物としてのイヌ、サルの訓練の結果からも単なる条件反射以上の行為であることは想像に難くない。学問的には1960年台から始まったゴリラ、チンパンジー、ボノボ等の霊長類を対象とした実験²¹⁸、また1980年台からのイルカ、オウムの実験²¹⁹から科学的にも実証されてきている。それ故に Dick King-Smith が *Harry's Mad* で登場させるオウムの Mad の存在もあながち全くの空想、願望の所産とはいえない現実味を帯びてくる。

Harry's Mad ではオウムの生理学的構造上 Mad は筆記用具をうまく持てない (p. 22) がゆえに Mad の言語能力はもっぱら読み、聞き、話す分野においてのみ発達し、発揮される。灰色アフリカオウムは言葉をよく覚える (p. 80) とされているが、Mad の言語運用能力は Mad 自身が「うまく教えられた」(p. 21) が故に平均的なオウム以上のものであると認めており (p. 23)、先の飼い主であった Harry の大伯父は、Mad が英語を自在に話し、英語で話されていることはすべて理解できるという能力を極秘裡にとどめていた。(p. 23) というのも世間を騒がせないため、また Mad を科学者の研究対象とさせないため (p. 23) であったという。その Mad の言語運用能力、また知力がどれほど優れていたかが多くのエピソードで語られている。²²⁰ また Mad の観察眼や洞察力の鋭さについても例があげられている。²²¹ これらの事々が Mad を家中で一番の物知り (p. 33) であると認めさせ、Harry を大きく成長させ (p. 88)、家族の心をとらえ (p. 58)、生活をより充実した面白いものにした (p. 58) のである。それ故に空き巣狙いがゆきがかかりで Mad を誘拐していった後の喪失感の大きさ (pp. 74-75, p. 89) はあらためて Mad の存在の重要性を一家に知らせることになる。加えて Mad がさらわれていなくなった間に Harry の11才の誕生日がやってきて、Mad のいない空虚さをうめられるかとの早計から、父親は Fweddy というオウムを Harry にプレゼントするのであるが、平均的なオウムの Fweddy の存在は Mad の不在をより強く感じさせるだけであった (p. 72-75, pp. 89-92)。それ故に2ヶ月あまり経って Mad が無事に戻ってきたときの喜びが一入 (p. 93, p. 103) であるのはいうまでもない。以上のように Mad の物語が呈する主題としての逆転はオウムの言語能力、知識が平均的な人間を凌駕し、ペットのオウムの存在が人間に成長と日常生活の充実をもたらしている点にある。

勿論 Mad もイギリスについて、またイギリス英語を学ぶ (pp. 27-28) のであるが、尋常でない事態、即ち日常生活や言語に関する知識に関してオウムが人間に勝っているという逆転が、飼い主の一家三人には何の抵抗もなく受け入れられている。そのうえ一家はオウ

ムに教えられることに喜びを感じているのである。人間が他の動物と比べて知的に優位であり、言語を意思疎通の手段に用いる唯一の生物である、という通常の認識が覆された状態を心の動揺なしに率直に受け入れている一家のこのようなあり方が示唆しているのは、人間が忘れてしまった、或は念頭に浮かばせることがなくなってしまった謙虚さ、人間の存在は自然のなかで特殊ではない、即ち他の動物の追従を許さないほどに優れて複雑な生き物ではないという事実認識ではないだろうか。確かに人間の言語を読み、書く動物は今のところいない。まねて話すことができるのもオウムや九官鳥といったごく限られた鳥のみである。しかしこれは人間以外の動物の肉体的構造上、例えば手指の構造、発達の度合、視覚の発達の相違、声帯の構造などといった諸器官が人間の言語を読み、書き、聞き、話すことに適した発達を遂げていないからである。動物の知力を総合的に知る実験において、表現手段を人間の文字、音声ではなく、それぞれの動物に可能な手段、例えば動作や、記号の組み合わせカードを選ぶ、更には記号を表示したコンピューターのキーボードを叩くこと、にすることで動物が程度の差はあれ、物の位置関係、色彩、形状、数量や分量、周囲の状況、自他の行動及びその意味、感情を認識し理解していることが明かになってきている。²² 認識の複雑さに程度の差はあれ、それぞれの動物がそれぞれの方法で自分自身、他者、関係式、状況を理解して生きているのである。その能力、観察、洞察は人間の基本的行動様式、感情を理解する場面にもある程度適用可能であると考えられよう。しかしながら残念なことに人間には他の動物がそうしていることを知る術が十分に備わっていないが故に、また現代の生活のなかで動物との関わりに費やす時間が少なく、密度が薄い故に、互いに与える影響が希薄であり、その結果理解が深まらないといえよう。

この人間と動物との関係における理解の欠落部分を開発可能な余地ととらえたと思われる物語の代表に「長靴をはいた猫」²³と「ドリトル先生」物語²⁴があげられる。前者は *Harry's Mad* と同様に動物に人間を上回る知恵を備えさせて人間を手助けする逆転の物語であり、後者は動物同士のコミュニケーションの手段を身に付けた人間が動物の役にたち、また動物に助けられながら冒険に富んだ旅をし、問題解決をしていく物語である。動物の知恵、動物とのコミュニケーションへの願望の所産といえる作品である。初出はそれぞれ1695年、1922年である。300年近い長い年月を経て依然「長靴をはいた猫」と同様の逆転した動物と人間の関係への願望の上に書かれた *Harry's Mad* には時代性、即ち発達した科学がもたらす知識に基いた事実認識が可能になったこと、をふまえての意味がこめられているはずである。現代は、猫が独自の判断で行動し、飼い主のみならず見ず知らずの人間に話しかけることがあたかも当然であるかのように、或は全く荒唐無稽な絵空事として、描きうる時代ではない。科学的知識、技術が多くの疑問に解答を呈し、日常生活では人間が万能であるかのような錯覚を抱く時代である。にも関わらず、「長靴をはいた猫」のように動物と完全なコミュニケーションを行いたいという、同じ願望が残り続けているのである。一方「ドリトル先生」の物語が書かれてから60年あまりを経て書かれた *Harry's Mad* に登場する Mad は、ドリトル先生のオウム、ポリネシア、に勝るとも劣らない博識を有し、大活躍することで依然として夢、ファンタジーの世界を作り出しているのである。

これはめざましい発達を遂げた科学を誇る人間にとって未だにオウムやほかの動物たちを理解しきれていないという未知の部分が残りに残っていることを示すものであろう。これら二点が示しているのは人間が哺乳類霊長目ヒト科であること、自然の一部であり、その営為、所産も自然界にあってのものであることを再認識する必要性が生じている、ということではないだろうか。*Harry's Mad* におけるオウムとヒトの言語能力、知識に関わる逆転はこの再認識の契機となりうるものと思われる。

VI

出版年の順に三つの物語における逆転の内容を概観して、それぞれの呈するメッセージと思われるところをあげたのであるが、三作の逆転が出版の順に人間との関わりを深めていることが分かる。*The Fox Busters* においては人間は頼りにならない暢気者であり、狐から鶏を守ろうとする意図による発砲が、狐と共に鶏までも殺してしまう間抜けぶりであり、鶏は鼻から人間をあてにしていない。*Magnus Powermouse* での人間は、科学の発達の所産として豚の肥育剤を作り出したが故に家畜ではないネズミに思いがけない影響を及ぼして、尋常でない大きさのネズミを生ぜしめ、ネズミ捕りの罠でネズミの足指、命を奪う加害者である。一方で優しさや愛情ゆえに動物との和解の可能性も有しているが、動物から見れば人間は動物にかまってもらいたがっている下位の存在でもある。*Harry's Mad* での人間は言葉に関する知識のみならず他の分野の知識も不十分であり、息子の気持ちを十分に理解することもできない未成熟なものである。また空き巣狙いの登場が示唆するように罪を犯すものである。このように物語の中での人間の位置は、単に役に立たないものから加害者、更には未熟であり、犯罪者であるというように低下してきているのである。これは人間存在の実像、本質により迫ってきているといえる。しかしながらその人間でも Harry の一家は動物への愛情、即ち動物の存在を受け入れ、認め、大切に思い、動物から学ぶという姿勢、をもち続けるゆえにオウムと理解、共生可能である。ここに人間が善なるものとなりうる契機、可能性が動物に対しての尊敬と愛情を通して現出しようという救いが残されているといえよう。Dick King-Smith の逆転の三作の物語は物語展開上の強弱、大小、上下関係、優劣の逆転と共に、純粋な愛情によって人間が善なるもの、自然の一部としての本来性へと再度むかい得るといふ、現代における大逆転を示唆するものとして、若い読者に警告とともに希望を与える佳作である。

注

- 1) 大阪女学院短期大学紀要 第24、第25合併号「Dick King-Smith の作品に於る可能性追及のメッセージ」
- 2) 大阪女学院短期大学紀要 第26号「Dick King-Smith 著 *Saddlebottom* の構造の特徴とその呈する希望について」
- 3) *The Fox Busters*, 1978. Puffin
- 4) *Magnus Powermouse*, 1982. Puffin
- 5) *Harry's Mad*, 1984. Puffin
- 6) *Daggie Dogfoot* の Daggie は犬のような前足を持って生まれ、*Saddlebottom* の Saddlebottom は

背中の模様の黒白が純血種本来のものと反転している。

- 7) *The Sheep-Pig* の Babe
- 8) Daggie は泳ぎを覚えて豚農場主の命を洪水のなかで救い、Babe は牧羊犬の技術を身に付けてコンテストで優勝し、Saddlebottom は音楽にあわせて行進することで所属の軍隊を有名にし、マスコットとなる。
- 9) ジョーゼフ、ジェイコブズ著 「ブリッグズの世界名作童話集Ⅱ」1988 篠崎書林
- 10) 「完訳グリム童話集Ⅰ」1982 金田鬼一訳 岩波書店
- 11) 非現実という「抽象原理に立つ文芸」(「昔ばなしとは何か」pp. 36-38)、「外観と実質のくいちがいが...昔ばなしのドラマを形成している」(「昔ばなしとは何か」p. 171)、度胸と知恵が「肯定的に評価される性質、行動」のうち動物への親切の「そのつぎに多い」特徴(「昔ばなしとは何か」p. 199)である。
- 12) 「昔ばなしとは何か」pp. 136-138
- 13) 「昔ばなしとは何か」p. 136
- 14) Ransome の“R”は“ring leader”, Sims の“S”は“sensible”, “Jefferey”の“J”は“jolly”の頭文字であるという母鶏の言葉。
- 15) 豚の肥育剤がすべて食べられ (p. 36)、ウサギ用に備蓄した餌も食べられ (pp. 69-70)、温室に保存していたダリアの球根も食べられてしまう (p. 26)。
- 16) 自分の小屋をネズミの両親の住み家に提供し、餌さを与え (p. 79)、助言を与え (pp. 60-61)、Magnus の大きさ、存在を好意的に受けとめ (pp. 47-48)、Magnus が行方不明になった時には「未来を予知できる」と嘘までついて両親に希望を与える (pp. 83-84)。
- 17) 「昔話の本質」p. 195
- 18) J. グドール「野性チンパンジーの世界」ミネルヴァ書房
松沢哲郎「チンパンジーマインド」岩波書店
“Time” 1993年3月22日号 pp. 54-61 “Can Animals Think?”
- 19) “Time” 1993年3月22日号 pp. 54-61 “Can Animals Think?”
- 20) 例えば人間の話すことは何でも理解できる (p. 22)、Mad という名前がアメリカ合衆国の第四代大統領 James Madison に由来していること (p. 21)、ピアノが弾けること (p. 22)、電話が使えること (p. 22, pp. 52-53)、野球、フットボールのルールや地理の知識 (p. 27)、トランプはカードが扱えないがドミノ、チェッカーズ、チェス (pp. 28-29)、モノポリはくちばしで駒を動かしてゲームを楽しみ (pp. 58-60)、人の声音の物まね (p. 16, pp. 41-43)、Harry の父親のクロスワードことにアナグラムの手助け (p. 45)、庭の手入れ (p. 45)、料理法とレシピの知識 (pp. 46-48, p. 53, p. 115)、文法に関しては品詞の区別 (pp. 49-50)、小学校の宿題の手伝い (p. 74)、テレビニュースを見てのディスカッション (p. 44) など多岐にわたって有能であることが紹介されている。
- 21) 観察眼については、Harry がいい性格でユーモアもあるが、一人っ子で少々自己中心的で学校の勉強もあまりしていないことを見抜いて自ら指導の役をひきうけようと決心したり (p. 31)、家族のそれぞれがゆで卵の食べ方が違うことに気付いたり (pp. 35-36) する。また洞察力については、Harry の父親が彼の伯父である Mad の先の飼い主を思い出させ、母親は料理が好きで上手なのでとてもいい家族だと Mad が言った時に、Harry が自分のことにふれられなかったことを寂しく思っているのを直ちに感知して、「僕たちは仲間さ」(pp. 56-57) ととりなしたり、一家が歓迎している訪問客かどうかを察知して対応に区別をつける (p. 52) というものである。
- 22) 「チンパンジーマインド」松沢哲郎、「ことばをおぼえたチンパンジー」松沢哲郎、「チンパンジーはちんぱんじん」松沢哲郎
- 23) 「ペローの昔ばなし」シャルル、ペロー著 今野一雄訳 白水社 1997
- 24) 「ドリトル先生航海記」ほか 岩波書店

参考文献

- グドール、J. 「野性チンパンジーの世界」、1990 東京：ミネルヴァ書房
- King-Smith, Dick. *Daggie Dogfoot*, 1980. London: Puffin
- King-Smith, Dick. *The Sheep-Pig*, 1985. London: Puffin
- King-Smith, Dick. *Saddlebottom*, 1988. London: Puffin
- King-Smith, Dick. *The Fox Busters*, 1978. London: Puffin
- King-Smith, Dick. *Magnus Powermouse*, 1982. London: Puffin
- King-Smith, Dick. *Harry's Mad*, 1984. London: Puffin
- リューテイ、マックス. 「昔話の本質」、1994. 東京：筑摩書房
- 松沢哲郎. 「ことばをおぼえたチンパンジー」、1989. 東京：福音館
- _____. 「チンパンジーマインド」、1991. 東京：岩波書店
- _____. 「チンパンジーはちんぱんじん」岩波ジュニア新書 No. 258、1995. 東京：岩波書店
- 小沢俊夫. 「昔ばなしとは何か」、1990. 東京：福武文庫
- 「ブリッグズの世界名作童話集Ⅱ」小林忠男訳. 1988. 東京：篠崎書林
- 「ドリトル先生航海記」ヒュー・ロフティング著、井伏鱒二訳. 岩波少年文庫. 1995. 岩波書店
- 「グリム童話集 I」金田鬼一訳. 1982. 東京：岩波書店
- 「ペローの昔ばなし」今野一雄訳. 1997 東京：白水社
- “Time” 1993年3月22日号